

PHAYAOLレポート 2008-09 (～ホームステイ～)

スタディツアー参加者からの報告 (日刊新周南 連載記事から)

藤屋侃二さん(68) 下松市幸ヶ丘 元KRY取締役ラジオ局長

2008年(平成20年)11月27日(木)

4



少数民族モンを訪ねる

～ホーム・ステイ

タイ第一の都市、チェンマイから東北東に二百五十キロ、バヤオ県ボン郡セーンサイ村が山口県のNGO・シャンティ山口が最初にかわりを持った村である。

第二次大戦後のインドシナ戦で、ラオスに生まれ、住んでいたが、インドシナ内戦でラオスを追われた。二十四歳の時、竹で作った小さな船で奥さんと子どもを連れてメコン川を下り、一時、タイの難民キャンプに住んだ。

今回、この村のトンさんの家に三日間、ホームステイした。トンさんは五十五歳。フランスの植民地のラオス移り、三十一年前から



トンさん一家と夕食を一緒に

この村に住んでいる。トンさんはフランスに住んでいる親せきを訪ねる。一回、フランスに出稼ぎに行ったこと

の娘は結婚し、同居の長男も結婚して孫が一人いる。

タイ政府は山岳地帯に住み着いたモン族に対し、共産ゲリラ化するのを恐れ、低地定住政策をとった。こうして生まれた村の一つがセーンサイ村である。

しかし定住したものの農地が少なく、年収は六万円から八万円。タイ人の十分の一以下である。

仕方なく今まで住んでいた山の畑で作物を作っているが、片道何時間もかかり、貧困からなかなか脱出できないのが現状である。

シャンティ山口は彼らが自立して少しでも豊かに生活できるようにと、複合農業を提案した。

一つの作物づくりでは病害虫発生や天候異変で被害を受けた時、その日の生活が困難になる。複合農業は、そんな場合でも果物、養魚、その他の野菜が生活を安定させる。

トンさんはシャンティ山口の指導を受け、最初に生姜(しょうが)を作って成功した。その金で自動車を買い、学校と契約し、雨季の間だけはあるが、彼の車がスクールバスになっている。

朝七時半、トンさんの家の前にたくさんの子どもが集まる。助手席に乗せてもらって一緒に学校に行った。タイの学校である。モンはこれ以外道はない。

校庭の子どもたちが大声でタイの国歌を歌い、タイの国旗が掲げられた。

校庭の片隅で、トンさんとこの様子を見ながら考えさせられた。トンさんは、どんな気持ちでタイ国旗の掲揚を見ているのだろうか。

祖父の時代に中国を追われラオスに、さらにラオスを追われてタイにきた浪の民、モンの子どもたちが何人乗っているか数えたら、何と30人も

このままタイに同化されてしまうのでは、という心配は第三者の意見だ。彼らは今生懸命に生きているのだ。

(元山口放送取締役ラジオ局長)

